視察用

様式(細則 5-2)

平成 29 年 8 月 30 日

浜田市議会議長
西　田　清　久　様

議員名　　飛野弘二　㊞

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1．期　　間　　平成 29 年 8 月 22 日（火）～平成 29 年 8 月 24 日（木）

2．視察先および研修テーマ

(1) 場所　　宮崎県日南市　子育て支援センター
　内容　　日南市子育て支援センター「ことこと」の取組について

(2) 場所　　宮崎県高千穂町　高千穂町役場および秋元集落
　内容　　世界農業遺産、伝統芸能の継承の取組について
　　地域資源を活かした取組について（秋元集落）

3．参加者　　飛野弘二、上野茂、串崎利行、平石誠、西田清久

4．調査経費　　１５８，４９５円／５人＝３１，６９９円
　内訳　旅費　83,695 円　宿泊費(体験料含む)　74,800 円

浜田市議会 受付 29.9.14

5．調査研究活動の概要

①　日南市　子育て支援センター「ことこと」の取組について
平成29年8月22日(火)　15：00～17：00
こども課長：黒岩保雄氏　　子育て支援センター所長：藤井真由美氏

(内容)

(1)施設整備の背景

・中心市街地活性化事業（平成24年11月から平成28年度末）の一環で整備。

・計画策定段階での市民の意見、要望などは次の通り。

○　市民アンケートでは、必要な施設の最多は大型商業施設21.8%、子育て支援施設も14.0%。

○　子育て世代のアンケートでは、遊具のある屋根付屋外スペースが第1位17.5%、子育て支援センター13.3%、地域住民も一時預かり機能充実、子育て環境充実を希望。

・東京おもちゃ美術館と「ウッドスタート」共同宣言（平成27年1月）

○　市内の3ヶ月児全てに「うごくぞー」（象の形をした木の遊具）を贈呈

○　市内小学1年生に「日南キューブ」（飫肥杉製の積み木）を贈呈

○　東京おもちゃ美術館の多田館長の日南市での講演、木育ひろばを紹介

(2)施設の概要

・子育て支援センターは民間施設の一部を賃貸している。

日南まちづくり㈱が所有する「Ittenほりかわビル」にテナントとし入居

・「ことこと」の整備費および運営費

○　整備年度　　平成27年度（設計）、28年度（工事）

○　経　　費　　160,070千円

設計、管理費　　18,201千円

工事費　　141,869千円

○　財源内訳　国の交付金　71,200千円（社会資本整備総合交付金）

起債　　79,900千円（児童福祉施設整備事業債）

一般財源　　8,970千円

○　運営費　　17,213千円（平成29年度当初予算ベース）

・施設面積、駐車台数

○　施設面積　　564.30㎡（171坪）

○　駐車台数　　一般利用者スペース約60台（立体駐車場）利用者2h無料

・家賃等

○　家　賃　　1,080,000円(税込)/月

○　共益費　　184,700円(税込)/月（ことこと1ヶ所分）

○　駐車場　　立体駐車場利用者2時間まで無料の発券1枚につき10円を負担。＊立体駐車場運営に対する補助金100万円/年を市が負担。

・施設の特徴

○　当初は、子どもに人気のあるキャラクターを活かしたミニ遊園地を想定

○　東京おもちゃ美術館長講演、飫肥杉産地、ウッドスタート宣言により木育を特化

○　購入したおもちゃ以外は、内装材を含め全て飫肥杉
○　設計、管理は東京おもちゃ美術館の木育ひろばを設計した㈱パワープレイス（東京）
○　スギコダマなどの製作に市民がボランティアで協力
○　木育ひろばとしての規模は日本一
○　工事はすべて市内業者、おもちゃの購入先はすべてグッドトイ委員会

(3)職員体制

・正規、嘱託職員、資格者
○　正規保育士　4名（所長1名、主任保育士2名、保育士1名）
○　嘱託保育士　2名
○　嘱託看護士　1名
○　嘱託子育て支援員　1名
○　再任用保育士　1名

＊　職員の代休、振休等もあり常時7～8人で対応。勤務は時差出勤のシフト制

(4)施設の機能

・遊び場と交流の場の提供
・一時預かりの実施
開設日9時～21時まで対応。有料：500円/2hその後30分ごとに150円追加
・○　子育て等に関する相談、援助　○　情報提供、講座の開催
○　木育サポーターの養成

(5)利用状況

平成28年まで市内2ヶ所にあった子育て支援センターの合計利用実績
平成27年度　12,855人、　平成28年度　10,791人
「ことこと」運用開始平成29年4月8日～7月31日までの利用実績14430人
平成29年度の利用見込みは20,000人であるが、実際は大幅に増。
施設の噂等で市内外、県外からの利用も増加しているとのこと。

(6)利用者の評価

・家ではぐずっていいても、「ことこと」にくると泣き止んで遊ぶ。
・「ことことに行くよ」というと、すぐに準備するようになった。
・幼稚園より「ことこと」が好き。
（幼稚園に行かないと「ことこと」には行けないと言うと、素直に行くようになった。）
・知り合いが少ない利用者に対する職員からの情報提供、同世代との出会いの機会はありがたい。

（所感）

木材は優しさを感じる。施設を利用している子供たち（付添保護者を含む）は目が生き生きしていた。木の香り・木の触感・木の音色・木の美形・・・。どれも、これも素晴らしい快適空間でした。木育ひろば体感でのびのび育つという子供たちは身体全体で実証しているようだった。

② 高千穂町　世界農業遺産、伝統芸能の継承について

平成 29 年 8 月 23 日（水）13：30～17：00

高千穂町議会議長：佐藤節生氏　　議会事務局局長：佐藤英次氏

総合政策室室長：甲斐宗之氏　　総合政策室主事：田崎友教氏

（内容）

高千穂町は天孫降臨の地としての誇りをもち、氏神様や山の神・水源神をはじめ、野山のいたるところに祀られている神仏への祈りを糧に、山の峡に拓かれた狭い田や細長い畑を有効に活かしながら、農村景観の保全を図るとともに、夜神楽をはじめとする高千穂特有の生活文化を大切に受け継いでいる。そうしたことから、平成 27 年 12 月 15 日「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」が世界農業遺産に認定された。認定内容として、本地域は山腹用水と棚田、木材生産、椎茸栽培、茶、肉用牛、焼畑という伝統的な農林業と村落共同体を維持する伝統文化「夜神楽」がその要旨である。

世界農業遺産認定の目玉として「神楽」が重要視されており、認定区域内の 5 町村に 87 の神楽保存会が存在しているとのこと。そのうち、高千穂町内では 30

③　高千穂町　地域資源を活かした取組について（秋元集落）

平成29年8月24日（木）9：00～11：00

民宿まろうど、高千穂ムラたび：飯干淳志氏

（内容）

秋元集落は、40戸100人集落で、集落のほとんどが斜面のため小さな水田が多く、枚数にして100枚以上である。そういった地域で、耕作放棄地の拡大にストップをかけたのが、今回訪問した、民宿「まろうど」である。主の飯干淳志氏が町役場職員時代から思い描いていた、地域活性化策の成功事例として研修させていただいた。

「株式会社高千穂ムラたび」が正式名称で、前述の民宿と「飲む点滴」としＴＶで最近話題の甘酒やどぶろくを造っている「まろうど酒造」があるのは、高千穂町の中心から南東へ車で40分ほど走った山深い集落だった。そこでは、主の奥様が民宿を切り盛りし、酒造では10数人の従業員が月5万本もの売上げを誇る甘酒のお化けブランド「ちほまろ」の製造に追われていた。驚いたことに、その10数人の従業員の年代は20、30代が中心であり、集落内外から通勤しているとのことであった。視察当日の朝も製造や出荷作業でてんてこまいの様子だった。

ここで製造されている甘酒「ちほまろ」は米こうじの甘酒に日と手間かけ、植物性乳酸菌で発酵。優しい甘酸っぱさとすっきりとした味わい。無添加だが常温保存で8ヶ月もつとのこと。折からの甘酒ブームに乗って、美容・健康志向の消費者の心をつかみ、前述の5万本/月の出荷本数を誇っている。販売から3年弱で売上げは年間1億円に迫るとのこと。原料の米は、集落内の棚田で栽培した「ヒノヒカリ」を農家から買い取っており、買い取り価格は農協価格の+2,000円。契約面積は3ヘクタール、100枚以上の棚田からなる。手の施しようの無かった耕作放棄地を見事に解消し、農家所得の向上に繋げられたことには、驚きの連続だった。社長いわく、受注数が日々増加しており、米が不足し、集落外へも手を伸ばしたいが、いろいろと障害があり苦労しているとのことであった。

（所感）

切り立った山々、狭小な生活道。しかし住民は頑張っている。「どぶろく」「栗きんとん」「杉丸太」・・・どれをとっても半端ではない。条件不利地にも関わらず優良企業揃いだった。若者も沢山居た。また、地元が大事にしている秋元神社。氏神の片隅に賽銭箱があり、そこには生活道改良の財源にする・・とあった。このように自分達の町は自分達で守りたいという意気込みを感じた。

の保存会があり、関係者（奉仕者）は 462 名で高千穂町内の男性人口の 7.6%相当する。（視察当日の説明員で出席の担当者も神楽関係者とのこと）

平成 28 年度の夜神楽公演の実績は、平成 28 年 11 月 12 日～平成 29 年 2 月 11 日までの 19 公演開催されている。公演場所は町内の公民館が主で、中には個人宅での公演も実施されており、当市との違いが感じられた。

本年 8 月には、町内 30 の保存会などが参加して、「夜神楽伝承協議会」が発足し、これまでなかった神楽のネットワーク組織が誕生した。この協議会には、神楽保存会のほか、神社の宮司や氏子総代、町公民館連絡協議会の代表、学識経験者が含まれている。今後、神楽の伝承者育成や、イベントへの派遣事業などを進めるとともに、昨年 11 月に九州 5 県の 10 神楽団体で発足した「九州の神楽ネットワーク協議会」と連携しながらユネスコ無形文化遺産への登録申請を目指すとのこと。

（所感）

世界で 36 箇所、日本で 8 箇所（中国 5 県には無い）。あの日本３大秘境の存在する椎葉村・高千穂町に隣接する５つの町村が力を合わせて、この世界農業遺産登録という大事業を成し遂げた事は、その根底にある文化があった。それは神楽であった。こういう地域住民の結束と努力が入り込み客 162 万人を支えていると強く感じた。この活動は浜田市も挑戦するに値すると感じた。